

同志会で学んだこと

下山寛美

はじめに

私は同志会が大好きだ。事実を積み上げ、人のことを鵜呑みにせず、確かめずにはおかない、という研究態度が大好きだ。偉い人がいなくなつて皆共同研究者。入門講座さえ提案者。初心者も古狸もみんな対等平等同じ仲間だよ。言いたい事を言っていんだよ。こんな同志会が大好きだ。それに、いつも実技と子どものお話をしてくれる荒木先生が大好きである。

そこで、荒木先生や諸先輩との長い付き合いの中で、みんなから聞いたり自分が体験したりしたエピソードや研究の進め方や指導方法などについて書くことでその任を果たさせていただきたいと思う。

聞き違いや、思い込みもあると思うがご容赦のほどよろしくお願いしたい。

荒木先生の人柄

大酒のみである。なんせ伊藤、永井の3先生で飲んだ金額を合わせれば家が何軒か建つとか。「中村は酒は飲まないで家で本を読んで勉強していた。俺らは飲みながら議論して勉強した。」(?)でも荒木さんが読んでおられる本の量も桁が違う、本を読むと知ったかぶつてすぐ話す。聞いたほうは癪だから本屋で探してこつそり読む。というような本を競争で読まれたそう。またポケットに入つてるお金を手に握り「いつせのせ」で出して何円あるから焼酎一杯と肴が一品飲めると言うような飲み方

もされたそうだ。そんな裸の付き合いができる友達がいることがとつても羨ましく感じられた。

丹下先生(同志会の創始者)のゼミで1週間に1度は必ずレポートを持って参加しなければならず、それがなかなか書けないでどっかに雲隠れして…、ということもあつたとか。荒木先生にもそんな時代があつたのかとレベルが違うのに安心したりして。何となく勉強すれば近づけるかなという希望を持つたりもした。

「下山君、元気だったかい。勉強したかい。」

最初に夏大会に参加した次の年の夏大会でのことであつた。大体私なんぞは駆け出しのペーパーで、そんな偉い人に名前を覚えてもらえるなんて夢にもおもわないものだから、とっても感激してしまつた。全国大会の夜はたいていどこかの部屋にいろいろな支部が集まつて話に花を咲かせる。今考えれば人と人とのつながりをとつても大事にされていたんだと思う。ただ実践を持つてきて、報告して検討してそれでおしまいではなく、研究し合う仲間だよつてことを感じさせてもらつていたんだと思う。私はいたつて気が弱いもんで隅つこのほうで小さくなつていたが、時々大きい屁が出たり、駄洒落が出たり、とつても楽しかつた。

実践で確かめる

「きき足が決まるのは大体3年生以降だよ。だからハドルは4年生以後に教えたほうがいいよ。」

そうか側転は聞き足が決まらない3年生までに教えたほうが両方できていいぞ。

「幼稚園で、毎日を鍛えようとして園の周りを走らせた所があつたんだけど、骨がしつかりしないうちに長い距離を走らせ、筋肉が発達したものだから、骨が曲がつてがに股になつちやつたんだよ。」

教材には適期がある。知らないということは恐ろしいことだ。

「足の速さはストライドで決まるんだよ。ピッチはおとな子どもでも大して違わないんだよ。階段を走らせて見れば分かるよ。ピッチを上げるには急な坂でも走らせればいいんだ」

もちろん足幅をできるだけ広げ、早く動かせば早く走るなんてことは、誰でも分かることだ。しかし早く走ろうとするとき、歩幅を広げようといつた誰が意識するだろうか。大体の人は足を早く動かそうとするのではなく、ストライドを広げることと、ピッチを早く

することの一致点をさぐるという学習課題ができた。でもこんな難しいことにすぐ取り組むほど大胆ではないので学校の小山を駆け下りさせ、ピッチを早めることから始めよう。

「小学生ではスタンディングスタートとクラウチングスタートとどっちが早いと思う。前傾姿勢を保つ筋力がなければスタンディングのほうが早いんだよ。それにスターティングブロックがなければ何にもならないんだよ。」
 そうか。考えてみればそうだ。発達も考えないで形だけ教えることのおろかさよ。これはみんなに教えずにや。

「他人の考えを鵜呑みにして、すぐ自分が考えたように言う人がいるけど、ちゃんと自分でも本に当たったり実践して確かめてから言うべきだよ。」

いいんだ。いいんだ。これは早く言ったほうがいい。間違った実践が少しでも減るから。もし自分で実践して違うよと言ってくれればしめたもの。その時は荒木先生に責任を取ってもらおう。

「何時間で何人できたは駄目だよ。何回で何人できたかでない。時間は学級の生徒数によってもやる回数が違ってくるし、放課後の練習は含まれないからね。」

に、がんばれと言うのは指導の放棄である。勝手に努力しろと言っているのと同じ。できないのはあなたの努力不足。実に冷たい指導。そう科学的に原因を分析し、きちんとできるための方法を提示してあげることこそ温かい指導なんだ。よく分かった。荒木先生の話にはいつも理論の裏づけとして、私たちでも実践的に試せる例が出てくる。きつと自分で試す中から理論が生まれているからだと思う。

「丹下先生が舟を漕ぐだろう。先生が上で怒鳴る役。俺が側泳で力のない人といっしょに泳ぐんだけど、力が尽きるとスーと沈むんだよね。もがいたり助けてくれなくていわないんだよ。そのとき腰を支えてしばらく泳いでいるとまた泳げるようになるんだよ。」

遠泳が全国大会であったころの話である。泳げるようになったことを遠泳で確かめるなんてすばらしいことだ。自然との結びつきがあった。子どものころいっばい海で遊び、突然潮の流れが変わったり、あるところの何時からは流れが起るなどという海の怖さを多少知っている私は、遠泳をやるための大変な苦勞と準備を思い羨ましかったものだ。

「荒木さんは飲むといいことを言うんだよね。だから俺

バック転の指導に夢中になって、4年生で全員できたと喜んでいたら時だった。そうか俺の指導によってできたと言いたいなら、こんな指導で何回練習させればこんな感覚が身につく、何人中何人はできるようにする、と言えないといけないんだ。実践に対する妥協やごまかしを許さない厳しい姿勢を感じた。

「あのね。みんなできたと言っても、教えないでもやってみせるだけでできる子がクラスには何人かいるもんだよ。」

自分の指導で全員できたなんてうぬぼれてはいけないのだ。

「科学的だから温かいんだよ。」

科学的というと数学みたいに答えがひとつしかなくて、いろいろな人の感情や思いを切り捨ててしまうような気がする私はなんだか変な気がした。

「指導する方法や中身がないときは、がんばれと言うしかないんだよ。」

そうだった。跳び箱が跳べない子に、いくらがんばれと言っても跳べるようにはならない。跳べるようになるための方法を教えずにはならないのだ。きちんと、なぜ跳べないか分析し跳べるようにしてあげることなし

は荒木さんと飲むときはいつもノートを持っていて書いていたんだよ。」

堀江さんの言葉。私もさつそく真似たのだがノートをそのたびに忘れてくる始末でどうにもならなかった。これはもう聞きたいことを聞いて後は覚えていただけであとでノートに書こうと決めることにした。

系統性について

(1) ドル平との出会い

私が初めて系統性研究の一端に触れたのは、群馬のコープシャトー（ホテル）で行われていた関東ブロックの水泳研究会の時である。このとき初めてドル平をちゃんと教わったのだが、曲がりなりに、ある程度クローリング泳げた私にとっては、とつてもなじみないものであった。トン・トンのびよってパツ。何だこの泳ぎは。まず全然前に進む気がしない。パツと呼吸した後は、深く沈みなかなか浮いてこない。とつても滑らかに、楽に泳げると思っていた私には期待はずれだった。でもそれはそれ、同僚であり大先輩であった奥田先生にやろうと言われ、子どもに指導することになった。それが不思議なことに子どもがどんどん泳げるようになっていくのだ。パツで

深く沈み、なかなか浮いてこなくても息をしっかりと吸える子は、50m泳いでしまうのだった。これは全く驚きであった。呼吸をしつかり教えることの大切さがよく分かった。何せ4年生が400mも泳ぎ、もつと泳げるなんていうんだから。これはもう私が泳げないのはドル平のせいではなく、泳ぎ方が悪いんだということになってくる。練習するしかない。ようやくリラクゼーションが十分取れていないで、息の吸い方が不十分なせいだと分かってきた。ちゃんと学ばないものを言うのはとってもし怖いことである。

(2) マット運動との出会い

系統性の正しさと実践性に本当に感激したのは、夏大会のマット運動分科会に参加した時であった。堀江先生がその時の提案者であった。その時までの私のマット運動の指導はと言うと、前回は首を入れて背骨一つ一つをゆっくりつけるようにして足を伸ばして回るというように指導して、体の線の一つ一つに神経の行き届いたすばらしい前回りなどと一人悦に入っていたものであった。しかし教える技は前回り、後ろ回り、三点倒立ぐら

うやることはなかった。そこでマット運動の指導はおしまい。次の単元に移るといような具合であった。

分科会の提案は驚くことばかりであった。「マット運動の基礎技術はジャンプを含む側転です」エツ、基礎技術って何だ。マット運動に基礎技術なんてあるのか。前回りのような体を丸めて回るロール系の小さな回転感覚は側転の中に含まれる。連続技が大事で単一技はその構成要素で前回りにも色々な種類があるんだから、連続技の中で使いこなせるようにならなければ、本当にできるようになったとはいえない。全く初めて聞くことばかりで驚きの連続であった。

その時の練習順序は、まず首振り歩きをやり、動物歩きで逆さ感覚や手足の協応動作の感覚を培い、側転につなげるというものであった。3種目連続でつなぎや、リズムの変化を研究させ、お話しマット（お話しに合わせて連続技を演技する）で子どもの自主性や、表現意欲を引き出そうとするものであった。

そうか。国語や算数と同じに体育でも何のために教えるかとか、子どもはどういう反応を示すとか、やっぱり教材研究が必要なんだ。なんて当たり前のことに気づいたりして。もう学校に帰って試してみたくてたまらなくな

なった。

学校に帰って2学期、今度は教える中身がいつぱいあった。早速側転である。そのころ側転なんて教えている人は誰もいなかった。子どもたちはのって、あつという間にできるようになりトイレに行くにも側転で行く始末。私が望んでいた、子どもが自主的に取り組む授業が実現してしまったのだ。

それに今度は教える中身が無限にあるのだった。3種目連続だつて側転・前回り・V字バランス、の組み合わせを変えてだけで9通り、前回りを2回使ってもいいことにすれば前回り・側転・前回りと言うように、また連続技の数が増えていく。なんとたった三つの単一技しか知らなくても連続技は無限に作れることになる。子どもたちが追求する中身が増えるのだ。

これまで教えることがないなんて悩んでいたのがうそみたいだった。もう嬉しくって体育はマット運動だけやっていて。子どもたちは先生が教え方を知らないにもかかわらず、ハンドスプリングまで練習し、3人完全にできるようになってしまった。

「これは僕たちの宝だね。先生、ほかの人たちには教えないでね。」と言って進級していった。

最後に

荒木先生を初め、諸先輩が長年にわたり実践し、研究を積み重ねてこられた系統性研究に対して、心から敬意を払いたいと思っている。

ドル平の誕生にしても、重いテープレコーダーをかつぎ、浦和の小学校に通い、子どもを指導する中で生まれたということ聞いた。吐いて吸うという呼吸の有用性を実践の中で確かめ、さらにその科学的根拠を求めて大学の研究室を訪ね、実証していくというような、執拗な追究が行われたそうである。

私たちは子どものできないという事実を子どものせいにはせず、あくまで教師のせいとして背負い、指導方法を工夫し、今日できるようにならなくても、明日こそというように、楽天的に継続的に実践をみんなで積み重ね一つの方法を鵜呑みせず、みんなできくつもの例に当たって確かめて来たという実践的態度を受け継ぎたいと思う。